

# 古文書を読む会学習記録

作成日 平成27年11月29日

開催日	平成27年11月26日	時 間	10:00～12:00
場 所	金沢公会堂	出席人数	15名
講 師	真田雅行氏	作成者	内田 孝知
テーマ	第2学習 越後人北前船漂流談（新津 小泉家文書）		
概 要	<p>越後人北前船漂流談ーその②</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・生活談ー酒は焼酎に似て辛い、夜は座敷、庭に蠟燭を沢山(108 燈)燈し、極めて明るい。衣類は股引の様なもの(ズボン)、肩章付ボタン掛け上着、脇差着用、花笠に似たものを着用。寒い時は火を焚くので袷で十分。夜具は無く、床に毛布団を敷き、毛氈(毛布)1、2枚使用 寒くは無い。米は不足、肉食、かれいは殊の外大きい</li><li>・センカに1年居住、海上千里程のヲホツカへ送られた。ここはセンカと同様ヲロシア国、但し寒気は倍の感じ。</li><li>・仕立屋の店頭で羽織・袴の人に手招きされ、高田屋と答えられる</li><li>・此処で水夫一人死去、他宗の為読経は無し</li><li>・此の地の僧はポウと言ひ、髪長く、妻帯している</li><li>・婚儀はポウが執行い、再婚は不可、但し死別の時は2度はOKだが3度は不可</li><li>・男女とも髪は赤白く、目付上ずり上向き、鼻紙は3尺4方の木綿を腰に付け始終鼻下を拭う</li><li>・王城(首都の事か)迄は往路6か月掛かる</li><li>・滞留1年、天保7年(1836)ヲホツカよりヲロフ(イトロフより海上7、8里)へ移る。革積用小船でイトロフへ上陸しようとしたがは松前藩役人が鉄砲打掛、上陸出来ず、その後別の所へ付け、伝吉、久太郎を上陸させようとしたが、お固めの地故と許されず、大筒まで打ち掛けられる。翌日早朝別の所に戸三郎、上陸。別れに際し船頭メトロイワンジ我を抱擁し、彼ら同胞の別れの挨拶をする。戸三郎上陸後、大筒二挺一度に打掛けられ、出船す。船頭メトロイワンジは松前役人衆への遣え物用意したが、以上の事より持参せず、私達の必要な物のみ与えて呉れた。</li><li>・天保8年(1837)出府し、同9年3月帰国する、以上漂流についてあらましお話しする。</li><li>・最後に フロシア之言語同人記得分 記す。</li><li>・此の漂流談は市島氏より3月14日借用、鎌倉吉沢子に頼み書写す。小泉<sup>もとかず</sup>氏計</li></ul>		
次回予定	平成27年12月10日 10:00～12:00 於:金沢公会堂3号室 第1学習 米倉家文書		